

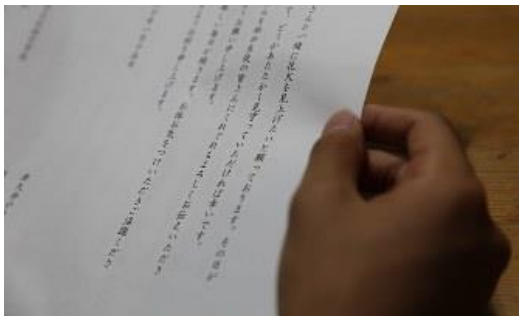


大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4447 号 2018.6.18 発行

津久井やまゆり園 事件を作文に 人の価値、誰にも決められない 近くの中3「また共



に花火を」 毎日新聞 2018年6月17日  
 男子生徒は入倉園長から届いた手紙を手に「早く戻って  
 きてほしい」と語った=相模原市緑区で、堀和彦撮影  
 入所者らが殺傷された相模原市の障害者施設  
 「津久井やまゆり園」の人々と交流があった中  
 学3年の男子生徒（14）が、園への思いを作  
 文につづり、「第37回全国中学生人権作文コン  
 テスト」（法務省など主催）の中央大会で奨励賞  
 を受けた。題名は「人の価値」。殺傷事件の被告  
 の男は障害者の存在をなじるが、生徒は作文で

「それは違う」と否定し、「相手の価値を勝手に決めず、互いに尊重しあえる社会を」と訴える。【堀和彦】

生徒はやまゆり園の近くに住む。清掃活動や運動会を通じて利用者と交流があった。作文では、毎夏に園主催で行われていた花火大会で赤や黄色の花火と一緒に見上げたシーンを回想する。

毎年そんな夜が僕は楽しみだった。

だが、あの事件が起きてしまった。

道端で園の利用者たちと交わす、何気ないあいさつ。笑顔で返す人もいれば、無言の人もいた。生徒は、利用者たちが笑って応じてくれていると感じ、作文にこう書いた。

その人が考えていることは本人にしか分からないはずだ。それはやまゆり園の重度の障がいを持った人も同じなのではないだろうか。

だが犯人は、返事をしないという理由で殺していった。

本人にしか分からないことを他人が決めるのはおかしい。障がいがあるからといって「不幸しか生まない」と言うのもおかしい。

殺傷事件から間もなく2年。やまゆり園は今、白いフェンスに囲まれ、建て替えに向けた工事が進む。生徒は入り口に立つと、かつての思い出と事件当初のつらい記憶が入り交じるといふ。

花火大会でにこにこ笑っていた人、歓声を上げていた人、ポーッとしながら見上げていた人。そんな人たちの顔を僕は忘れることができない。

みんなに価値がある。人の価値を決められる人は誰もいない。だから僕は、相手の価値を勝手に決めず、相手の価値を互いに尊重しあえる社会であってほしいと思う。

「地元の中学生在がこんなにも思ってくれていたとは」。やまゆり園の入倉かおる園長は作文を読んですぐに筆をとった。手紙に「戻った時には、また皆さんと一緒に花火を見上げたい」と書いた。

やまゆり園は現地と横浜市内の仮移転先を拠点に小規模・分散化され、利用者は2021年度から各施設を順次、利用できるようになる見通し。

生徒は5月、毎日新聞の取材に「みんなとふれあう機会があったからこそ、障害があっても何ら変わらないと気づくことができた。花火を楽しみにしている」と語った。

#### ■ことば

#### 相模原障害者施設殺傷事件

2016年7月26日未明、相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者が次々と刃物で刺され、入所者19人が死亡、職員3人を含む27人が重軽傷を負った。19人の殺人罪などで逮捕・起訴された元園職員の植松聖被告(28)は「障害者は生きていても意味がない」などの言動を重ね、検察側による起訴前の鑑定では、自己愛性などの複合的なパーソナリティ障害と診断された。

#### 写真家の蜷川実花さんが撮影してくれた雑誌の写真 メディアの中の障害者

産経新聞 2018年6月16日

日本財団パラリンピックサポートセンター刊行のフリーマガジン「GOジャーナル」をご存じでしょうか。昨年創刊された障害者スポーツを紹介する雑誌で、5月17日発行の第2号に掲載していただきました。同じパラ競泳の山田拓朗選手のインタビューやさまざまな競技の日程も掲載されているので、読んでいただけると嬉しいです。

表紙も含めた写真は、写真家の蜷川(にながわ)実花さんに撮影してもらいました。カメラは苦手なんですけど、このときの撮影は楽しくてあっという間。仕上がった本を見てすごいと思いました。

このように、障害者スポーツを知ってもらいたくてさまざまな取材を受けてきましたが、私の場合、メディアに出ることを批判されて嫌な思いをしたことはあまりありません。もしかしたら障害者を批判することへの遠慮があるのかもしれない。

同じように障害者スポーツの場合、結果が出なくても非難にさらされることは少ないです。それは、スポーツとしてまだ認められていないからなのかな、とも思います。これがオーストラリアだと、結果を出せばすぐたたえられる一方、出ないと厳しく批判される。それがいいか悪いかはともかく、障害者スポーツもスポーツの一つとしておもしろいと感じてもらえたらいいなと思っています。



「GOジャーナル」は梅田蔦屋書店などで無料配布しているほか、送料負担で取り寄せも可能。問い合わせはメール(g o j o u r n a l @ p a r a s a p o . t o k y o)で。

#### 高津のカフェで働く障害者ら 調理、接客に懸命

東京新聞 2018年6月17日

お客にコーヒーとお菓子を提供する石田さん(左)＝高津区で



川崎市高津区に五月にオープンしたカフェ「ビジネスステーショントウリス」では、一般就労が難しい障害者がスタッフとして働いている。調理作業や接客技術を学んで飲食店への就労を目指すなど、意欲的に仕事をこなしている。(小形佳奈)

カフェは、一般就労が困難な障害者が工賃を得て働く「就労継続支援B型事業所」が入る建物の一階にある。誰もがそれぞれの仕事をするため利用できる共同オフィスを兼ね、四人掛けの座卓やテーブルがある。月会費五千円を払うか、カフェのメニューを頼むと、営業時間中(月曜～木曜の午前10時～午後3時)は自由に使える。飲食のみの利用もできる。

スタッフは、同事業所を利用する障害者たち。カフェではコピー取りやシュレッダー作業を代行するサービスもあるため、「外部の人と接し、本格就労に向けた事務作業を学ぶ場

にもなる」と、カフェのオーナーで事業所を運営する米田高志さん（37）。二階の台所で、カフェで提供するカレーや果実シロップを作るのも事業所の利用者だ。

スタッフの一人で横浜市緑区の石田諭一さん（31）は、二十四歳の時に統合失調症と診断された。自宅で過ごす日々を経て昨年四月、この事業所に通い始めた。ラーメン店や居酒屋で働いた経験があり、「調理作業が楽しい」と目を輝かせる。接客技術なども磨き、飲食店での就労につなげるつもりだという。

カフェは、コンサルタント会社社長の矢口大輔さん（42）と米田さんが共同経営する。二人は福祉業界を経て起業した経験を生かし、会員向けの起業相談や、会員同士のビジネスマッチングに別料金で応じる。「スタッフにとっても、カフェ利用者にとっても、仕事創出の場になれば」と話す。カフェの所在地は高津区久地一の一の二の一。問い合わせはツアーリズム＝電 044（328）9759＝へ。

### 重症心身障害者の 生涯ケア態勢整う

中日新聞 2018年6月17日



（上）入所者が過ごすことになる居室（下）吸引器などが必要な入所者が安心して移動できるよう配慮された療養介護棟内＝いずれも富山市下飯野で

#### 県リハビリテーション病院

県リハビリテーション病院・こども支援センター（富山市下飯野）に、重度の肢体不自由と知的障害が両方ある重症心身障害者らを受け入れる療養介護棟が完成し十六日、見学会があった。七月から入所者を順次受け入れる。

同院には十八歳までの重症心身障害児を預かる「こども支援センター」があるが、療養介護棟の開設により、十八歳以上の重症心身障害者や神経難病患者の入所が可能となる。これまでは十八歳を過ぎると、県内外に転院するなどしなければならなかったが、年齢に関わらず「児者一貫」のケア態勢が整う。

療養介護棟は、病院敷地内にある旧高志リハビリテーション病院五階の病棟を改修して整備した。病床数は三十床。本年度は、筋力が次第に低下していく「筋ジストロフィー」患者ら十八人が入所する。一時預か

りもできる。整備費は二億五千万円。

スタッフは看護師や医師ら二十五人程度を配置し、機能訓練や看護、介護、日常生活の世話などのサービスを提供する。棟内には、人工呼吸器や吸引器が必要な患者が安心して移動できるよう居室だけでなく、共有スペースにも専用の設備を設けるなど配慮している。

見学会には医療や福祉関係者ら約四十人が出席。県リハビリテーション病院・こども支援センターの橋本二美男院長は式典で「障害福祉の推進に貢献できるよう万全の対応で運営する」と話した。（山中正義）

### 筋ジスと闘う小沢綾子さん 新宿で旅行報告会

東京新聞 2018年6月17日

身体が自由が奪われていく難病、筋ジストロフィーと闘いながら、歌と講演で全国を回って「今を生きる大切さ」を訴えている社会活動家、小沢綾子さん（35）＝墨田区＝が充実した福祉で知られるデンマークを車いすで旅した報告会を新宿区内で開いた。（井上幸一）

「デンマークの人たちの顔は生き生きとしていた」と小沢さん。報告会には、車いすの四人を含め、約五十人が参加。写真や動画で旅行を振り返り、関係者とトークを繰り広げ

た。

視察旅行は、障害者の国際交流などを進める非営利一般社団法人「グローバルカタリスト」の仲介で先月、九日間行われた。現地の筋ジス協会などを訪問、フェスティバルにも参加して日本語の歌を披露した。

後方にデンマークでの写真を写し、旅行を報告する小沢さん=新宿区で(百年書房提供)

初の著書となる詩集絵本「10年前の君へ 筋ジストロフィーと生きる」(五百四十円、百年書房)を今年著した小沢さん。訪れた筋ジス協会のレジャー施設について「ホテルよりおしゃれ。便座の高さも利用者に応じて上下する」と振り返り、「五十、六十代の患者が、不自由だが、ストローでワインを楽しそうに味わっていた」と難病の人たちの生活を報告した。

一方で、「車いすでの移動は日本のほうが楽。コペンハーゲンには古い街並みで石畳が多く、ガタガタして大変だった」とも。「(車いすで)電車などに乗る場合、デンマークでは予約が必要。車いす移動の環境比較だと、日本に軍配が上がるかも」と旅で気付いた日本の良さも話した



## シシ肉豊富、ピリッ ジビエカレー商品化

中日新聞 2018年6月17日



### 白山の障害者施設

白山市鶴来本町の障害者就労支援施設「生きがいワークス白山」は、同市の特産品を使った「白山麓ジビエゴロゴロカレー」を商品化した。冷凍して市内のスーパーや道の駅で販売し、施設で働く障害者への利益還元や地元食材の消費増を目指す。

(谷口大河)

イノシシ肉と剣崎なんばをふんだんに使った「白山麓ジビエゴロゴロカレー」=白山市鶴来本町で

カレーは白山麓で捕獲されたイノシシの肉と、同市剣崎町特産のトウガラシ「剣崎なんば」を使い、四日かけて煮込んだ。施設の飲食部門「みらくる」で、障害者五人と職員二人が調理を担当している。

「みらくる」では一食六百四十八円(税込み)で食べられる。

十六日には試食会があり、来場者がイノシシ肉がふんだんに入った辛口の味わいを堪能した。

また施設外に販路を開拓しようと、真空パックして冷凍した「販売用」を作っている。市内のスーパーや道の駅などに卸す予定で、まずは月に約千五百食を生産するという。

施設を運営する「生きがい工房」(金沢市)の奥田和也社長は「販売数を増やし、障害者の工賃増につなげたい。好評なら地元産トマトや鹿肉入りのカレーも企画したい」と話した。

「剣崎なんば」使用 冷凍し販売へ

販売用は一人前百八十グラムが四百三十二円、五人前九百グラムが千九百四十四円(いずれも税込み)。(問) 生きがいワークス白山076(225)4362

## セカンドステージ 認知症とかかわる 表情読み合い、予防に有効

毎日新聞 2018年6月17日

<くらしナビ ライフスタイル Second Stage>

社会的な存在である人間にとって、他者とのかかわりは避けて通れない。認知機能の低

下を防ぐうえで、人とどのようにコミュニケーションを取っていけばいいのか。認知症の前段階の人や初期の人たちの取り組みから探った。

#### ●孤立なくす「学び舎」

1時間目・体操、2時間目・朗読、3時間目・絵画―。時間割の書かれた黒板の前で、70～80代の女性6人が詩を朗読する。西東京市のNPO法人「サポートハウス年輪」が4月に始めた事業「昭和の学び舎（や）」に地元の人たちが集う。

コンセプトは「ごちゃまぜ」。介護保険で「要支援」認定された人や、より元気な市の介護予防・生活支援サービス事業の対象者の通所サービスとして認可されたが、1回500円の利用料で、子どもから大人まで誰でも参加できる。職員が手伝うので、自分の趣味を生かしたい人は「先生」にもなれる。送迎も行い、孤立を防ぐ工夫が凝らされている。

「こういう場所を求めていた。初心者向けのマージャンも楽しみ」と田中和子さん（86）。カラオケが好きでおしゃべりを楽しむ友人もいるが、病気で入院してから足が弱り、行動範囲が狭くなっていた。介護保険の認定は要支援2。近くのグループホームから参加している認知症の女性が朗読に詰まると、さりげなく声をかける。

頸椎（けいつい）の手術で入院していた女性（74）は市のサービスの対象者。移動が不自由になり、家にこもりがちに。物忘れが増えて心配だった。「認知症の人と一緒に活動し支えることで、自分も認知症について学べるので不安の軽減になる」と励みにしている。



昔懐かしい学校の教室を模した部屋で、マージャンを楽しむ人たち＝西東京市の「昭和の学び舎」で

#### ●運動で機能低下防ぐ

「右はグー、チョキ、パー、左はチョキ、チョキ、グー、よく見てくださーい」。茨城県取手市の認知症専門クリニック「メモリークリニック取手」。外部講師で健康運動指導士の藪下典子さんのかけ声で、60～80代の男女30人が左右の手を別々に動かす。「上達しないな

あ」。おどけた男性の声に笑い声が起きる。

ダンスでは、5、6人で輪になり、威勢よくタオルを振り回す。同県守谷市から来た男性（80）は「自宅でも毎日体操するが、ここは新しい友人がいていい」。

藪下さんは進行役を務めながら、参加者が感じたことを声に出せる雰囲気づくりをこころがける。「痛い、と感じたら言葉に出して、体のどこが痛いのか意識する。体を通して脳を働かせるわけです。“やりたくない”というネガティブな表現でもよいのです」

このクリニックでは、他に芸術療法、ゲーム、体の特定部位に意識を集中させる筋力トレーニングなどのプログラムがある。認知症の前段階である軽度認知障害（MCI）や認知症初期と診断された人たちが、週1～3回通う。治療という目的を同じくする仲間とコミュニティを作る感覚で継続を目指す。理事長で医師の朝田隆・東京医科歯科大学特任教授は、同県利根町の住民1900人を12年間追跡調査し、生活習慣と認知症予防の関係性を研究してきた。

「MCIと認知症の初期に限ると、運動は、認知機能低下をある程度まで防ぐ効果がある。メカニズムはまだはっきりしていないが、運動が新しい神経や血管の生成を促し、予備能（潜在的に備わっているが使われてこなかった能力）を引き出すと考えられている」と話す。

#### ●「社会脳」を活用

運動に加えて、機能低下の防止に役立つと見られているのが、人と交流し「社会脳」を活用することだという。

「社会脳」とは何か。哺乳類は、同じ種類の動物でも大きい集団に所属する個体ほど、脳の神経細胞が集まる大脳皮質の層が厚いことがわかっている。神経細胞をたくさん使うため、思考をつかさどる大脳皮質が発達しているわけだ。

大きな集団に属していると、その分、人間関係も複雑になる。群れの中で生きていくためには、相手の表情の変化を見つけ、笑いかけられたら笑みを返し、人の心の動きを理解することが必要になる。相手の過去の言動を記憶しておき、思い出すことも求められる。「相手の好きなこととか、以前こうしたら怒ったな、とか。他者とのかかわりで求められる高度な認知機能が社会脳です。社会脳がさびつけば、その下部にある記憶力や計算力、集中力といった機能も低下するといえます」と朝田さん。利根町の調査では、特に女性の場合、認知症が始まると外出を嫌う傾向が顕著だった。出無精になるのは、認知機能低下のサインかもしれない。

朝田さんによると、交流の相手は大勢でも少数でも、家族でも他人でもよい。知人である必要はなく、一度きりのやりとりでも社会脳を使う。要は、密なつきあいでなくていいのだ。ほめることも大事。「人はほめられればやる気が出る。ほめられたかったら自分も相手をほめる。仲間でほめ合うことも有効です」【大和田香織】

高たんぱく質食品で筋肉強化

高齢者の低栄養やそれが引き起こす筋力の低下を背景に、“高たんぱく質食品”に関心が集まり始めた。高たんぱくをうたったそば、うどんまで登場している。どんな食品なのか。

高齢者の低栄養とは、日常の食生活で栄養が足りていない状態をいう。国民健康・栄養調査（2016年）によると、65歳以上の高齢者の17・9%が低栄養傾向にある。伊藤明子・赤坂ファミリークリニック院長（公衆衛生専門医）によると、たんぱく質の摂取が不足すると、筋力や免疫力の低下、情緒不安定、認知機能や思考力の衰えにもつながるといふ。そこへ運動不足が加わると、筋力が低下して骨格と関節を支える機能が弱くなり、要介護になるリスクが高くなる恐れがある。

国は18歳以上の男性で1日あたり60グラム、女性で50グラムのたんぱく質の摂取を推奨している。100グラムの魚や肉類を食べると約25グラムのたんぱく質がとれる。同様に、大豆製品100グラムだと約5～7グラム、卵100グラム（2・5個相当）だと約12グラムのたんぱく質がとれる。こうした目安を知っていればいいが、手軽にとれる高たんぱく質食品として、ギリシャヨーグルトが人気だ。昔からギリシャでつくられてきた水分の少ない濃縮ヨーグルトで、通常のヨーグルトに比べ、たんぱく質は約2倍（100グラムの1カップサイズで8～10グラム）ある。

また、牛乳に含まれるたんぱく質の一種で、粉末状のホエイたんぱく質を練り込んだそば、うどん、パスタも登場。体内での吸収もよく、筋肉の材料になるアミノ酸バランスもよい。

ホエイたんぱく質の商品提案で来日した米国の栄養コンサルタント、レズリー・ボンチさんによると、米国ではひと足早く、高たんぱくブームが起きている。介護が必要になる高齢者を減らすために、高たんぱくが有効との研究データが出て、メーカーによる商品開発が相次いでいるからだ。市販の粉末状ホエイたんぱく質をジュースに入れたり、お菓子の材料にしたり、家庭で幅広く使われているという。

ボンチさんは「高たんぱく質食品は体脂肪を減らしながら、筋肉をつけるのに適している。ホエイたんぱく質なら料理の味に影響しないので、日本なら、おかゆやみそ汁に入れてもいい」と和食にも勧めている。【小島正美】

認知機能の低下を防ぐには

- ・運動を生活習慣に取り入れる
- ・相手の表情の変化を見つける
- ・笑顔を向けられたら笑みを返す
- ・相手の趣味や習慣などを記憶し、必要に応じて思い出す
- ・自分をほめる
- ・ほめてほしいと感じたら相手をほめる
- ・コミュニケーションの相手が誰かや人数にこだわらない（常に同じ集団に属する必要はなく、密なつきあいでなくてよい）

※軽度認知障害（MCI）や認知症の初期までが対象

※朝田隆医師の話から作成

和歌山市 初の市立こども園 20年春開園「芦原」と「本町」 独自教育・保育の充実を目指す / 和歌山 毎日新聞 2018年6月16日



本町認定こども園の完成イメージ。4階建てで、3、4階には事情のある子どもの支援施設が入る＝和歌山市提供

和歌山市は2020年春、市立認定こども園を市として初めて2カ所に開園する。市は、計31カ所の市立保育所と幼稚園を11カ所のこども園に統合する計画を進める一方、園の施設・機能を充実させるといい、担当者は「良質な幼児教育・保育の提供につなげたい」と話している。【木原真希】

認定こども園は、幼稚園と保育所の両機能を併せ持つ施設として06年10月に始まった。保護者の就労の有無を問わず0歳～就学前の子どもを受け入れ、保育と教育双方のサービスを提供する。

こども園への統合に伴い市は、管理職の人員費や管理費を減らす一方、園児以外でも一時預かりする機能を設けたり、障害のある子どもと一緒に過ごせるように手厚く職員を配置したりするという。

計画のスタートとして、芦原幼稚園と芦原、新南の2保育所を統合して同市雄松町5に「芦原認定こども園」を、本町幼稚園と中之島、四箇郷の2保育所を統合して同市北桶屋町に「本町認定こども園」を、それぞれ開園する。いずれも定員約150人で、施設は新たに建設する。

市によると、統合後も全体の定員は維持するが、遠方に通わざるを得ない家庭も生じる。

市子育て支援課の担当者は「出産した後に復職するなどして就労状況が変わっても、こども園には継続して通うことができる。市の独自策も合わせ、設備・機能を充実させたい」と話している。市内には市立施設に加えて、民間の25保育所と13幼稚園、19認定こども園がある。

いただきます 卵焼き弁当×山谷・まりや食堂 160円がつなぐ命

毎日新聞 2018年6月17日



イラスト・佐々木悟郎

ステンドグラスが映えるまりや食堂の菊地譲代表＝東京都台東区で、後藤豪撮影

簡易宿泊所が並ぶ東京・山谷に小さな弁当屋がある。名前は「まりや食堂」という。



開店前の夕方、教会の1階にある店に白髪交じりの男たちの行列ができる。「いらっしやい」。牧師で食堂代表の菊地譲さん（77）がステンドグラスの扉を開けた。

いつも列の先頭にいる男性（68）は7年前からの常連だ。父の顔と名前を知らない。地方を転々としながら働き、山谷にたどり着いた。今は離れたまちで暮らす「顔を見るとやすらぐ」と電車とバスを乗り継ぎ弁当を買いに来る。

菊地さんは東京五輪で日本が沸いた1964年ごろ、山谷で暮らす子どもに勉強を教え、簡易宿泊所の厳しい生活ぶりを知った。会社員を辞めて青山学院大学院で神学を学んだ。「働く人たちと苦しみをともにしよう」。日雇い労働を10年続けた。

80年代後半のバブル時代、日雇い労働者が集まる「寄せ場」の山谷には活気があふれた。菊地さんは85年に伝道所を開いたが、満たされなからかアルコール依存症に陥る労働者を何人も目にする。「言葉の伝道よりもまずは食べることだ」と88年にまりや食堂を始めた。売り出した生卵定食は当時のカップ酒と同じ220円。「1杯の酒を断って食事をしてほしかった」

バブルが崩壊すると冷え込んだまちに路上生活者が増えていく。食堂を弁当屋にした後、健康を保てるように野菜類を付け合わせた卵焼き弁当を売り出した。160円前後にする定番商品になった。

今年3月、卵焼き弁当を買いに来た男性が菊地さんに「殺されるよ」とつぶやいた。「うん?」「高齢者の仕事が切れたんだ」。路上生活をしているようで前日は無料で配る乾パンを取りに来ていた。

もう年できつい仕事はできない。高齢者向けの軽作業は少なくなかなか回ってこない。それでも生活保護は受けたくない……。そんな男性に店の掃除を頼んで弁当を渡そうと思っていたが、姿を見せなくなった。

山谷を食で支えて30年。2回目の東京五輪が近付き、山谷の空にはスカイツリーがそびえる。その足元でかつて日雇いでならした高齢者たちが一日一日をつないでいる。「山谷の問題は社会の縮図だ」。どんな時代にもぎりぎりの生活をする人がいるから、卵焼き弁当の値段は変えない。

「殺される」とつぶやいた男性はしばらくして300円のカレーを買いに来た。「仕事があったんだな」。菊地さんは少しほっとした。店のスタンドグラスで描かれた聖母「まりや」が夕日に照らされ、2人を見守っていた。【後藤豪】<イラスト 佐々木悟郎>

## 明るく丁寧に介護競う 高校生県大会 角さん江頭さんペア (神埼清明) 最優秀



佐賀新聞 2018年6月17日

連携してスムーズな介助を披露した最優秀賞の角さん(左)、江頭さんペア＝神埼市中央公民館  
明るく声掛けをする嬉野高の生徒たち＝神埼市中央公民館

福祉を学ぶ高校生が出場する「第8回佐賀県高校生介護技術コンテスト」が16日、神埼市中央公民館で



あった。参加した高校生は、明るい声掛けや、ベッドへ移動する際の安定した介助など日ごろ学んでいる技術を披露した。

県内6校の生徒たちが2人1組で参加した。車いすを使う右上下肢麻痺の80代女性をベッドへ移動する設定で介助した。参加者たちは、7分間で動作ごとに声掛けをしたり、介助者自身が体を痛めないよう安定した体の動きを心掛けたりと、工夫を盛り込んだ技術を見せた。

審査の結果、最優秀賞には、神埼清明高の角綾子さん、江頭奈生さんペアが選ばれた。2人は8月に久留米市で開かれる九州大会に出場する。

競技終了後には、福祉の学びを将来の仕事につなげようと「第1回ふくフェス」(県社会福祉協議会・西九州大共催)を開催。西九州大で介護福祉士や社会福祉士の資格取得を目指す学生によるパネルディスカッションがあった。3、4年生5人が登壇し、福祉の専門科目の内容や資格を学ぶ意味について語った。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行